

アンリエットとジャンヌ，それぞれの主婦修行

——19世紀フランスの家政書から——（I）

末 広 菜穂子*

はじめに

前稿⁽¹⁾において、19世紀フランスで発刊された家政書を論究の対象とし、経済活動が活発化するとともに、旧来の社会体制が大きく変化したこの時代に、主婦向けに書かれた家政書が数を増したこと、また、その内容が従来の家政書から若干の変化を示していることを述べた。具体的にいくつかの家政書を取り上げて検討した結果、家政における主婦の役割を重要視する傾向が顕著に現れていること、家計管理という経済的責務について、その実質的増大が見てとれることを指摘した。

しかし、そこで取り上げた家政書は、主として裕福な中・上流階層主婦を対象として執筆されたものであり、それらの家政書の多くは、その基本的構成がそれ以前の時代のものとは大きく異なるわけではなく、領地経営のためのいわゆる従来の家父長向け家政書を踏襲した形式が多く見受けられる。確かに、衛生志向・経済性志向といった新しい概念が家政管理のなかに取り入れられていく傾向は認められるが、家政における主婦の役割はあくまでも衣・食・住に関わる家庭内の事物・人事管理と子どもの教育に限定され、その経済力は、夫の経済力を忠実に反映するものでしかなく、家計の管理は夫から預かった財布の管理を意味するものであった。女性の家庭外での活動は、体面を保つための儀礼的な社交上の役割がその主たるものであった。また、家政書で語られる家政観・家族観は、古来の伝統的家政観・男女役割を新たに色づけし、強化したものとも言うのであろう。従って、前稿の検討では、家政管理の重要性とそこでの主婦の役割増大に対する認識が高まり、これが19世紀の多数の家政書の発刊を促したことを確認できたが、実際の主婦の経済上の役割と

* 広島経済大学経済学部教授

(1) 末広菜穂子「19世紀フランスにおける主婦の経済観念」広島経済大学経済研究論集第22巻第2号（1999年9月）25-43ページ。

その変化については限られた範囲でしか知ることができなかったと言える。

しかしながら、現実には庶民層に属する社会の大多数の女性は家庭の内外で労働し、中・上層の主婦よりもより切実にこの時代の経済変化の波にさらされていたはずである。そのような女性たちが置かれていた経済生活の実態をできる限り細やかにとらえ、彼女たちが抱えていた問題について知ること、そしてまたそうした問題について当時どのような認識がなされ、いかなる関心が向けられていたかを把握することは、女性と経済の関係史を辿る上で肝要である。

本稿では、これを明らかにするための一つの材料として、庶民層の女性を対象として書かれた家政書を取り上げる。女性教育における家政学の必要性が指摘される中で、従来より幅広い階層の、特に若い女性向けに書かれた家政書が19世紀後半から登場し始めるが、その中には、明らかに庶民層の女性に向けて書かれたと考えられるものはいくつか見受けられる。家事・家政に携わり、家計も支える、女性の大半を占める働く女性を対象とした新しい家政書である。もちろん、家政書の中に説かれているのはあくまでも生活のモデルであって、現実生活そのものではない。また、これら庶民層の女性向けの家政書においても、そこに横たわる価値観は、大半の家政書の執筆者、すなわちブルジョワジーの抱く価値観であることに変わりはない。しかし、現状認識を踏まえて書かれたと考えられる良心的家政書の中に、当時の庶民層の女性が置かれていた現実の問題のいくばくかを読みとることは十分可能であろう。さらに、押しつけられたブルジョワジーの価値観は、紛れもなく、庶民層の人々の現実生活の一部となって、彼らを導く灯火とも、また束縛する枷ともなっていたはずであり、そうした状況を把握しておくことは重要である。庶民の女性たちの実際の家政や経済生活の実情を直接物語る史料の稀な中で、これをアプローチのための一つの手がかりとしたい。

1. 『家庭の幸せ』について

ここで取り上げる家政書『家庭の幸せ (*Le bonheur au foyer domestique*)⁽²⁾』は当時出版されているものの中でも、上に述べた関心を満たす上で恰好の家政書であると言える。

19世紀後半、様々なタイプの家政書が存在するなかで、特に顕著なのが、学校教育への家政学 (*économie domestique*) の導入以降、より体系化された若年向けの

(2) Piétrement, Maria, *Le bonheur au foyer domestique, livre de lecteur courante pour les jeunes filles*, Paris (Garnier Frères), 1891.

平易な家政学のテキストが多数登場したことである。⁽³⁾ 無知で未経験の少女が家事や家政になじみ、新しい家庭を作りあげていくための心がまえを身につけることができるように意図して編集されたものである。各方面の識者によって多くの家政書が著され、優れたものにはアカデミー・フランセーズなどから賞が与えられている。『家庭の幸せ』もそうしたものの一つである。著者の Piétrement については学校教師という肩書き以外は不明であるが、1882年のカリキュラムに従ってこの家政書の執筆を行い、その優れた点が評価されてこの著書は1887年にランスで Prix Doyen-Doublié を受賞し、91年にパリでの出版にこぎつけている。⁽⁴⁾ この書の特徴としては、他のテキストと同じく、対象としている読者が働く女性——正確には、これから社会に出て働こうとしている少女——であるということであろう。教育の無料化・義務化・非宗教化の第一の目標は、庶民層をよき市民へと育成することである。従って、夫のもたらず収入の下に使用人を用いて家政の采配をふるう中流階級以上の主婦をもっぱら対象としていたそれまでの家政書に代わって、自ら家事仕事をこなすだけでなく、家業を助け、あるいは外の職場で働き、家計を支える労働者として家庭に不可欠な経済的支柱である主婦に、近い将来なるべき少女たちに助言を与えるようなテキストが求められたのである。Piétrement の家政書はその対象を明確に庶民層の少女のみに置いたものである。

しかも、形式的工夫にもこの書は特徴がある。『家庭の幸せ』は、通常の体系的・教科書的な家政書の形式をとるのではなく、アンリエットとジャンヌという結

(3) Jule Ferry の1880年代の教育改革により、教育の無料化、義務化、非宗教化が推進され、女子の就学率が上昇した。カリキュラム整備においては、女子に対して、裁縫を初めとする手仕事や道徳教育・自然科学教育、リーディングとも関連させた家政教育の必要性が説かれ、そのための読本が著されることになった。以下のものはその代表的なものである。Chalamet, R. El., *La première année d'économie domestique. Morale, soins du ménage, hygiène, jardinage, travaux manuels, suivi de notions d'instruction civique et de droit usuel. ouvrage contenant des préceptes, des récits, des résumés, 100 gravures, 70 devoirs de rédaction, lexique, à l'usage des écoles de filles*, Paris (Librairie Classique Armand Colin et Cie), 1893. 及び Wirth, Ernestine, *Livre de lecture courante des jeunes filles chrétiennes, lectures de la division élémentaire* (1st éd., 1870), *lecture de la division supérieure* (1st éd., 1872), Paris (Hachette).

(4) 現存する Piétrement の著作は、この著作のみである。Linda L. Clark による19世紀末から20世紀初めにかけての学校教科書の研究の文献表にはこのテキストは掲載されておらず、発刊数も定かではない。重版もされていないようで、Chalamet や Wirth のテキストのような普及はしなかったものと思われる。Clark, Linda L., *Schooling the Daughters of Marianne, Textbooks and the socialization of girls in modern French primary schools*, Albany (State University of New York Press), 1984.

婚前の二人の少女の間に交わされた書簡集の形で全体が構成されている。二人の少女はそれぞれの生活風景を手紙の中で語り合うわけだが、そこで伝え合う家政や家族生活にまつわる様々な情報、家事のノウハウなどが読者に伝えられるという仕掛けである。よき主婦をめざす修行過程で二人の少女はさまざまな場面に遭遇し、自らの知恵を絞りあるいは家族や知人から教訓を得て家政についての様々な教えを会得する。実体験した少女自身の感想とともにそれらが語られており、想定された同じ年代の読者層の共感を得る工夫が施されているのである。二人の少女が学校を出て結婚に至るまでの5年間に、読者である少女たちも自らの将来を重ね合わせ、似たような体験をなぞりながら家政に必要な知識を得ることができるのである。この書のこのような工夫は、単に家政技術を種類別、あるいはアルファベット順に羅列する形式の他の多くの無味乾燥な家政書に比べて、読者の興味をつなぎ止めやすく、読み進む中でより自然にかつ容易に知識を摂取するのを可能にしている。手紙の中には少女と他の家族や友人との日常会話が頻繁に取り入れられ、読みやすくする配慮がさらになされている⁽⁵⁾。

また、この家政書では、少女の一人はパリで、もう一人は田舎で暮らし、遠く離れ境遇の異なる二人が手紙を交わし合うという設定がとられている。従って、それぞれの少女が置かれている都会の労働者家庭と地方の農家——当時の庶民層のほとんどが実際にこのどちらかに含まれていたはずである——という異なる二つの暮らしが同じ重さで並行して描かれることになる。これによって、都市の読者も農村の読者もこの家政書を有用に使うことができる。読者層を限定して執筆する傾向にあった中・上流主婦向けの家政書に対し、一般向け家政書ということ意識して、より幅広い多くの読者の便宜を図ろうとした著者の工夫がうかがえるとともに、農村と都市という異なる二つの社会を描き出し、お互いへの理解を促すことによって、社会を支える良き市民を作るというこの当時の教育改革の目標にも適った著作であると言えよう。

読者は都市と農村それぞれの暮らしに必要な家政の情報をそこから引き出すことができるだけでない。二人の少女が友からの手紙で興味津々に知りえたと同じように、自分とは異なる生活についての知識も得ることができるのである。パリに暮らす少女の経験するような消費生活は田舎ではまったく新奇なことである。また、農

(5) こうした物語形式の家政書読本はイギリスでは庶民の若い女性読者層の購読する雑誌に連載されてソープ・オペラの原型として人気を博していたが、その多くはメロドラマ調のものである。Attar, Dena, *A Bibliography of Household Books Published in Britain 1800-1914* (Prospect Books), 1987, p. 14.

村で守られてきた昔ながらの生活の知恵は、そうしたものから疎遠になりつつある都市居住者にも大きなヒントを与えてくれる。著者はどちらを偏重することもなくそれぞれの生活の特徴を紹介している。読者は、生活の変革が進む都市生活と土地に根付いた伝統的農村生活という、二つの生活スタイルの長所と短所を知り、読み比べた上で、アイデアと知恵を取捨選択して活用することができるのである。二つの生活を並行して描き出した著者の真のねらいもそうしたところにあったと言えるのではないだろうか。だとすると、当然、生活描写や家事仕事は両者の差を意識して書かれているはずであり、著者によって認識されていた現実の生活とそこにある問題点を解決するべく創案された理想の生活という両方の側面がここに描き出されたと考えてよい。その点を踏まえれば、この書の持つ当時の生活をうかがい知るための史料価値は高いと言えよう。当時の都市と農村において、どのような生活上の違いがあり、そこに暮らす人々の中にどのような生活感の差があったのかを知ることもできるであろう。

まず、簡単にこの書の概要を紹介しておこう。アンリエットとジャンヌは同い年の——アンリエットが少し年長ではあるが——従姉妹同士である。彼女たちが手紙を取り交わすのは二人の別離から再会までの約5年間で、計67通の手紙が交互に交わされる。最初の手紙は1882年2月2日、パリに到着したアンリエットからジャンヌ宛に、最後の手紙は1887年2月13日、パリを出発するアンリエットからジャンヌ宛に出されたものとなっている。一通が1章乃至2章を成しており、全書計70章の構成である。各章には、その章の手紙で語られる家政の要点や教訓がタイトルとして付記してある。また、巻末には手紙の中で紹介された料理や家庭薬、洗剤などのレシピ、その他の家事項目などを分野別・アルファベット順に整理した索引が付記され、読者の利用の便宜が図られている。

アンリエットは母の死後、幼くしてパリで働く父の元を離れ、ペリゴール地方にある父の郷里 Mareuil に住む祖母に預けられる。優しい祖母はもちろん、近所に住む父の妹夫婦も、その4人の子どもたちに対すると同様、両親のようにアンリエットに接し、かわいがる。とりわけ同い年の従姉妹のジャンヌとはほんとうの姉妹、真の親友として心を通わせ、仲睦まじく育つ。

Mareuil での幸せな5年が過ぎてアンリエットが14歳を迎えたとき、パリで働く父親のもとで母の亡きあとずっと家事を取り仕切ってきた姉のエリザが、結婚して新しく所帯を持つこととなった。アンリエットは学校を出てパリの父の家で姉に代わって小さな主婦としての務めを果たすことを決心し、仲の良い二人の少女に別れのときが訪れる。ジャンヌも、学校を出て、両親を助け農家の仕事と家政を身につ

けるときが来たことを悟る。こうして、大都会パリと片田舎の Mareuil にそれぞれ別れて暮らすことになった二人の少女は、苦勞と喜びに満ちたそれぞれの修行経験を語り合う手紙を5年の間とり交わすことになる。励まし合い、互いの得た知識・技術・知恵を交換しながら二人は立派な主婦をめざして成長していくのである。パリという大都会での労働者の生活と地方の伝統的な暮らしがかわるがわる登場し、それぞれの生活スタイルに必要な家事労働と家庭を取り巻く様々な問題、事件が取り上げられて紹介され、それぞれにふさわしい解決方法が提示されている。また、二人の手紙には、少女たちが覚えた料理の作り方をレパートリーを広げるためにお互いに教え合おうと、必ず末尾に料理のレシピが書き添えられている。料理や素材名で整理した巻末の索引をたどれば、読者は様々な料理の作り方のヒントを得ることができるようになっているのである。

二人の少女にはそれぞれ最適の指南役がいる。パリに出たアンリエットにアドバイスを与えるのは、近くに住む姉のエリザである。エリザはブロンズ鑄造工であるリュシアンと結婚したばかりで、自身は高級レースの店の仕事を内職で引き受ける熟練したレース修繕工として家で働いている。結婚後、アンリとリュシーという二人の子どもを次々ともうけて育てながら、リュシアンのおききパートナーとして、家事を完璧にこなすエリザは、アンリエットのめざす主婦の模範像を、亡き母に代わって体現する人物として登場している。エリザの指導のもと、アンリエットは慣れない大都会で、失敗を重ねながら主婦の仕事をこなしていくことになる。ジャンヌの腹違いの兄、フェリックスがちょうど兵役でヴェルサイユに駐屯しており、週末ごとにアンリエットの家を訪れるが、姉一家を交えてのささやかな団らんのひとときはアンリエットが一番の楽しみである。姉の家でレース仕事をともにしたり、可愛い盛りのおきな甥や姪の世話をし過ごす時間も、アンリエットの生活に大きな喜びを与えてくれる。

農家の主婦をめざすジャンヌのお手本になるのは、やはり主婦として農家を立派に取り仕切っている母親、マルリエ夫人である。手紙の中でマドモアゼルと呼ばれている学校時代の先生も、しばしば日曜日の散歩をともにし、ジャンヌにいろいろと有用なアドバイスを授けてくれるよき相談相手である。兄のフェリックスが兵役に就いて不在である4年間、父親とともに農作業、酪農作業、庭仕事に大忙しの母親を助けて、ジャンヌは料理と家禽小屋の世話を引き受ける。やんちゃな弟ルイや妹ジュリエットは助けにもなるが、いろいろと面倒も引き起こす。アンリエットがいなくなって淋しがる年老いた祖母の世話にも何くれと心を砕かねばならない。忙しい農家の仕事の明け暮れのなかで、徐々に経験を積んだジャンヌは、家事を身

につけるだけでなく、家禽小屋の鶏や卵、菜園の野菜、果物などの生産を増やし、これを市場に出荷して利益を上げるという才覚も発揮し、農場の帳簿をつけることも任されるようになる。そして、このジャンヌの手腕に目を留めた裕福な豪農の息子との良縁に、ついには恵まれることになるのである。

一方、アンリエットの運命も急激な変化を見せる。父が病いに倒れて働けなくなったため、エリザが内職を引き受けているレース店のアトリエへアンリエットは働きに出ることになる。生計を支えながら、父の看病と家事をやったのけなくてはならないという苦境をアンリエットは自ら引き受ける。しかし、外の世界で働くことで、アンリエットの世界は広がり、名実ともに自立した女性として成長を遂げることになる。やがて、病いは癒えたものの、もはや元の仕事に復帰することは体力が許さない父は、ついに故郷の Mareuil に戻ることを決意することになる。アンリエットはそのままパリにとどまるか、父とともに Mareuil へ行くかの選択を迫られることになる。心の奥底ではアンリエットとともに帰郷したいと願う父ではあったが、アンリエットが田舎の生活でみすみす苦勞するよりも、姉のエリザのように都市で適当な結婚相手を得て幸せに暮らしていくことの方が幸せではないかという思いも内心あった。父に付き従って田舎に帰ることを迷うことなく決めたアンリエットに届いたのは、婚約の決まったジャンヌからの手紙で、そこでジャンヌが熱心に勧めたのが、兄フェリックスとの結婚であった。パリでともに過ごした4年間で、フェリックスとアンリエットの間には、互いに尊敬し、愛し合う心が自然に育っていたのである。アンリエットは兄に代わってのジャンヌの結婚申し込みを受け入れ、Mareuil で農家の主婦としての道を歩むことを決心する。こうして、すべての者が喜び歓迎する二組のカップルの結婚式が、同じ日に Mareuil で執り行われる運びになったところで、アンリエットとジャンヌの手紙の交換も終わりを迎えることになる。

このように、それぞれ伴侶を得てめでたく本物の主婦としての第一歩を踏み出すまでの、5年間に亘る二人の少女のそれぞれの主婦修行というのがこの書簡形式の家政書のあらすじである。手紙は、家族や友人の近況報告などとともに、その時々二人の少女が行った家事や日々の労働についての報告に多くが割かれている。二人の少女の身の回りに次々に起こる小事件の筋を追ってだけで、それに関連して紹介される家事仕事の詳細に親しむことができる。アンリエットがパリで覚えた新しい家事の手法をジャンヌに教えるかと思えば、ジャンヌの方は母親から教わった昔ながらの知恵に基づくレシピを書き送る。著者の Piétrement は構成を巧みに工夫して、読者を飽きさせない。少女たちは使命感と熱心さにあふれて懸命に主

婦修行に励むが、まだまだ世間知らずであり、不安と夢で胸が一杯で、時には失敗したり、勇気が挫かれるときもある。同じ立場にある同年齢の読者は、等身大で二人の少女のさまざまな経験を受けとめることができるのである。

以下では、『家庭の幸せ』のなかで展開される少女たちとその家族の日常生活、そして、そこに描かれる理想の家政・理想の主婦像に関する言説を抽出し、家政の経済性、および家政の責任者である働く主婦の経済的役割がそこにどのように期待され、表されているかについて検討を加えていくことにする。まず次章では、二人の手紙の中に登場する家事労働の種類とその内容を見ることから、日常生活のありさまを整理してみたい。それぞれが報告する衣・食・住に関連する家事についての記述を順に比較を加えながら見ていくことで、都市に住むアンリエットと農村に住むジャンヌのそれぞれの生活の特徴、その相違点と共通点をあぶり出し、家事仕事や家事労働の経済性についてのこの書の考え方を探ってみたい。

2. 日々の暮らしと仕事

日常生活のリズム

これまでずっと生活をともにしてきた従姉妹が、遠いパリで毎日いったいどのような暮らしをしているのかというジャンヌの純粋な好奇心に答えて、アンリエットは自分の一日の日課を詳しく手紙で語っている。

父親が早朝6時に仕事に出かけるため、アンリエットの朝は早く始まり、父を送り出したあと、午前中に部屋の整えと掃除、洗濯、繕い物、アイロン掛けなど家の仕事を全部済ませてしまう。食料の買い出しに出かけたあと、昼食に帰ってくる父のために食事の支度をする。昼食の片づけが終わると、夕食を用意する時間まで姉のエリザの家でレースの仕事を教わる。夕食後も針仕事など手を休めることはない。父が病気で倒れるまでのアンリエットの生活はこのように穏やかに淡々と過ぎていく。エリザの可愛い子どもたちの成長を見守る驚きと喜びが、生活にアクセントを添えてくれる。また、前述したように、父、姉一家、フェリックスとともに過ごす日曜日は、アンリエットの一番の喜びとする日であり、みな揃っての楽しい午後の散歩とディナーや団欒のくつろいだ時間を楽しみ、このひとときをなつかしく思い返しなが、次の一週間をまた過ごすことになる。

田舎のジャンヌの一日の生活については、生活をともにしていたアンリエットがすでによく承知しているため、手紙ではことさら語られてはいない。ジャンヌは食事の支度と家禽小屋の世話を任されているが、掃除、洗濯、衣服の手入れ、縫い物、庭仕事、弟妹の面倒など、母親を助けるべくほかの多くの仕事もこなしている。農

場の仕事は季節の求めに応じて変わり、夏から秋にかけての農繁期、とりわけ夏場は農作業の手伝いにも忙しくなる。弟や妹も学校を休んで手伝うし、季節労働者が雇われると、その世話にも追われることになる。冬を迎えようとする時期も、春の作物のための種蒔きや保存食作りなど、しなくてはいけないことは山積みである。日常の家事はその合間を縫って行われ、時間のかかる大掃除や繕い物などの針仕事は冬場の仕事になる。

ジャンヌにも日曜日にマドモアゼルと散歩をしておしゃべりをするという週末の楽しみがあるが、その生活のリズムは、一週間単位というより、四季の仕事に追われる農家の暮らしと対応して流れているようである。それに対し、アンリエットの生活は、季節の変化と無縁とは言えないが、週日は外へ出て働き、日曜は休息する父親や義兄の労働生活に呼応した、一週間の規則的なリズムによって、よりはっきりと刻まれている。二人の少女の生活が都市型と農村型の異なるリズムのもとに流れていることが確かめられるのである。二人の少女の報告する家事の内容を比べてみても、アンリエットよりジャンヌの方が、四季の変化に伴って行われる家事仕事が圧倒的に多くなっていることからそれがうかがわれるのである。

衣生活にかかわる家事

家事労働の季節の特徴を最もよく示しているのが衣生活にかかわる家事である。衣にかかわる家事は、衣服の製作、購入、整理、洗濯、アイロン掛け、修繕など多項目にわたり、この書でもかなりの分量の記述がその説明のために割かれている。

表1でジャンヌの側の手紙に書かれている項目を見ると、その多くはシーズンを迎えての衣服の用意やシーズンを終えての衣服の整理・修繕・片づけである。4月のジャンヌの手紙には、春の訪れとともに必要となる衣更えの作業のことが綴られている。毛皮やウールなどの冬の衣服にブラシを掛け、染みを抜き、よく風にさらしてから防虫剤（粒胡椒、樟脳、除虫菊、タバコなど）を入れて丁寧に包装し、暗所にしまっておく。この大変な手間に、手伝いに来ていたジャンヌの友人のマルグリットは驚くが、虫食いの小さな穴をあとで修繕する面倒に比べれば結局時間がかからないのだとジャンヌの母に諭されることになる。

冬の衣服を片づけると同時に必要なのは、夏に着る薄物の準備である。育ち盛りの年齢の子どもたちの場合、衣服は毎年手直しが必要である。丈を伸ばしたり、幅を出したりする必要がある。2年間着古していても扱いの丁寧なジャンヌの服は、マルグリットのまったく手入れをしない新調の服よりきれいなぐらいだが、やはり丈が短く、幅もきつくなってきている。少し余分にとっておいた縫い目のところで

調整できる場合はそれでいいが、それで足りない場合は、配色の合う布を足して流行の服に作りかえる方法が紹介されている。もっと小さくなったり痛みがひどいときは、妹のジュリエットの服に作り直す。男子服は縫い目が多すぎて、丈伸ばしや幅出しが難しいが、父親の古い服をルイのために工夫して利用することはできる。

修繕が必要なのは衣服だけではない。シーツ、ナプキン、布巾、下着などのリンネル類⁽⁶⁾の手入れがある。シーツは真ん中から擦り切れてくる。2枚の布を縫い合わせて作ったシーツは、縫い目をほどこいたあと、もう一方の縁を縫い合わせ直して擦り切れた場所を移動させて使う。また擦り切れたら、最後は布巾にして徹底的に再利用するのである。注意深く日頃から手入れして使用し、使用できなくなったら手を加えて再利用する。こうした伝統的な節約の心がけは生活の隅々に至るまで固く守られていることであるが、どのような場合にでも当てはまるかというところではない。例えば、非常に薄手のランジェリーなどの修繕は、熟練した技と長い時間を要するが、買い直してもそれほど高いものではない。ジャンヌの母のマルリエ夫人は、これは「浪費の修繕」であるとして、そのような仕事に長い時間を割くのは無駄であると教える。ただし、何が無駄で何が浪費かを判断するには慎重さが大切である。

——新しいのを買うときは、もうそれ以上得になることはないかどうか考えなく

表1 アンリエットとジャンヌが報告する家事の主な項目（衣関連）

	アンリエット	ジャンヌ
衣に関連する家事	洗濯釜での洗濯法 布地別の洗濯法 染み抜き 産着の準備 ミシンの使い方 衣服の製作 帽子の製作 主婦の身だしなみ	リンネル類などの修繕 アイロンかけ 衣類の整頓 衣類の香りづけ 衣服の修繕 刺繍 冬用衣服の片づけ 花嫁衣装の準備

(6) 結婚支度の話の中で、ジャンヌは田舎ではリンネル類をたくさん揃えすぎて筆筒の中で黄ばませて無駄になっていることを指摘している。しかし、農繁期の時は洗濯や繕いに手が回らないので少し余分に揃えておくことは収納場所のたっぷりある田舎の家では必要であるとしている。リンネル類の素材についても、田舎では木綿は健康に良くないという偏見のために嫌われ、亜麻が好まれるが、実際には吸湿性のよい安価な木綿が、労働で汗をかく湿潤な気候の土地にはふさわしいとしている。Piétrement, Maria, *op. cit.*, p. 361, 362.

てはね。⁽⁷⁾

節約するにしても、物の価格と時間の経済性の両方のバランスを考えるべきであるという発想がここには表れている。ただお金を使わず節約することだけが経済的なことではない。

同じような考え方は、アンリエットの側の手紙にも出てくることである。姉のエリザと衣装箆の点検をする話が出てくるが、すでに一年間着た日曜日のよそいきの服を、アンリエットは手入れをして外出着としてもう一年保たせようとする。それに対してエリザは古い外出着は普段用に下ろして外出着を新調することを強く勧める。パリでは流行り廃りが早いので、一年経った服はもう流行遅れで滑稽に見えてしまうというのである。

——毎年、一着はいつも買う必要があるわ。…よそいきの服をそのままいつまでも着続けるのは行き過ぎよ。…流行に合わせて形を変えたりしたら、新しい服を作るより結局お金を使ってしまうことになるわ。⁽⁸⁾

エリザは、流行遅れになったものは普段着に、そしてさらに古くなったらペチコートに下ろして行って着回すようにアドバイスする。

——センスのある装いをするので評判のパリの人々は服をたくさん持たないのよ。特に古い服はね。移り変わりの早い気まぐれな流行には合わないんですもの。⁽⁹⁾

新しい服のためにできるだけ安い布地を選ぼうとするアンリエットに、エリザはこうも助言する。

——でも、とても安いということが一番経済的だということではないのよ。⁽¹⁰⁾

染めも織りもしっかりしたものを選ぶのが大事で、それには麻や木綿はふさわ

(7) *Ibid.*, p. 122.

(8) *Ibid.*, p. 127.

(9) *Ibid.*, p. 128.

(10) *Ibid.*, p. 128.

しいものではなく、やはりウール地のものがよい。安物は結局すぐに価値がなくなってしまう。かと言って、あまりに高価だと一年で普段着に下ろすことがためらわれてしまう。布地は上質だが、飾りや襷が少ないシンプルなものにすれば、価格も抑えられ、何より洗濯やアイロン掛けなど、あとの手入れも楽で、面倒がらずこまめにできるのがよいとエリザは布地の選びの経済性にも気をつけることを妹に教える。

同じ外出用でも、帽子の場合は、流行遅れになった昨年の古い帽子を姉妹は節約のため自分達で器用に修理し、飾りをつけ直して新しい流行のデザインに作りかえている。新品を60スー出して買うより、少し時間はかかるが、心楽しく、しかも大いに節約できる作業である。また、生まれてくる子供の産着も、安い市販品が出回っているにもかかわらず、エリザは安物は粗悪だし、産着を用意する母親の喜びを失うことは間違いだと出来合いのものは買おうとしない。時間や手間のかかる作業でも、そこに価値を見出せるものについては、必ずしも経済性が優先するわけではないのである。

衣服の維持管理は家事の中でもとりわけ時間のかかるものである。ジャンヌの家では、繕いや縁かがりの作業は、ちょっとしたものは洗濯後に点検して籠に入れて取りのけておき、できるだけ早く時間のあるときにやるようにするが、時間のかかるものは筆筒に入れておき、冬の夜なべ仕事に回す。最初、ジャンヌの家ではこうした繕い物作業はすべて手縫いで行い、時間のかかりすぎて手に余るものだけ、ミシンを持っている近所の婦人に頼んでいた。マルリエ夫人はミシンが欲しいと常々思っていたので、ジャンヌはアンリエットにミシンについて情報を知らせてくれるように頼む。アンリエットは、ミシンが経済的で、しかも時間を大変節約すること、それほど高価でないミシンもあると書き送る。

——チェーンステッチのできる小さなミシンが30～35フランの値段です。中釜がしっかりしていて使いやすいのが55フランです。それを私たちは今使っています。これは手動式で、家族のための仕事を何でもすることができます。仕立屋用には足踏みで動くものがあるが、150～200フランで、とてもよい機械です。でも伯母さんが一つ買おうとするなら手動式の方がよいでしょう。一日中ミシンを動かして働く人は、胸を痛めます。ミシンの動きを和らげ疲れを弱めるペダルが必要⁽¹¹⁾です。

(11) *Ibid.*, p. 127.

この情報を得て、マルリエ夫人は早速ミシンを購入する。ジャンヌは冬になって暇ができたなら、それで自分の服を縫うつもりだと書いている。

——田舎では仕立代は都会より安いけれども、私がちょっとした物の作り方はみな覚えることをママは望んでいるの。⁽¹²⁾

こうして覚えた服の製作が、のちにジャンヌの良縁に結びつくのである。⁽¹³⁾

都市からの新技術の情報は洗濯についてももたらされる。アンリエットがパリに出て、最も不安に思っていたのが、都市の狭い住居でどのように洗濯をしたらよいかということであった。例えばジャンヌの家では、洗濯やアイロン掛けは毎日こまめにするわけではなく、量が溜まり、時間があるとき行う。汚れたリンネル類などは洗濯するまで黴が生えないよう、屋根裏部屋に広げて干しておくのである。田舎の家なら、スペースに余裕があるので、溜めておくにも、干しておくにも屋内外の場所に困ることはないし、川や池の水を潤沢に使って大物洗いの場合も水場で盛大に叩き洗いすることができる。しかし、都会のアパートマンではすべてが問題である。アンリエットはエリザに洗濯の方法を尋ねる。洗濯は大仕事と考えていたアンリエットは——実際、田舎ではそうであったのだが——、姉が洗濯は一日で済ましてしまえると事もなげに言うのを聞いて、田舎者と思って馬鹿にすると怒るのである。

エリザの教える洗濯法は蒸気式洗濯釜で煮洗いする方法であった。⁽¹⁴⁾少量の水と洗剤を底に入れた釜に洗濯物を入れ、火にかける。沸騰した洗濯液が管を伝って釜の中を循環して洗濯物に完全に染みわたるよう2時間ほど煮洗いする。その間は火加減に気をつけてさえいれば、他の仕事をするのであり得るのである。火を止めて洗濯物を釜から出し、汚れがさらに取れるようもみ洗いや染み抜きをして、すすぐ。台所や換気のよい場所にロープを渡して干し、冬場は火を焚いて早く乾かすようにする。早く乾けば、その日のうちにアイロン掛けも済ましてしまうこともできる。

洗濯釜は小家族用なら15フラン、大家族用でも20フランの価格で、エリザの言で

(12) *Ibid.*, p. 136.

(13) ジャンヌの結婚相手であるシャルルの父親ポーモン氏は、ジャンヌが金を使わないのに身仕舞いがよく、家族の服を自分で作っていることに、嫁としての長所を見出している。*Ibid.*, p. 352.

(14) この蒸気式の装置は René Duvoir による大型機械登場（1837年）以来、改良を重ね、Bouillon, Muller, Ducoudun らによって簡便化、低廉化が進められた。

は耐久性にも優れ、汚れをよく落とす。むやみに漂白する必要がなくなるので、布の痛みも少ない。都会における費用のかからない簡単な洗濯を実現するものである。もっとも、エリザの住居では、幸いにも各階に水が出るので、すすぎを家で行うことができる。水がなければ、共同洗濯場まで濡れた洗濯物を持ち運びするという大変な重労働が避けられないので、この洗濯釜を用いるメリットは減じてしまうだろう。現に、洗濯にそうした装置を用いることに対する躊躇や偏見からも、その普及は遅れている事が指摘されている。アンリエットも、教科書でしか知らなかった洗濯釜の洗濯法を実地に経験した上で、その簡便さに納得しながらも、田舎の広々とした空間での昔ながらの洗濯風景を懐かしんでいるところがある。しかし、エリザは、都会では便利さと経済性を得ることで満足しなければならないと論ず。そして、アンリエットの手紙で洗濯釜の利点に納得したジャンヌの家でも、早速これを購入することに決めるのである。

食生活にかかわる家事

毎回送りあうレシピを含めて、二人が手紙で最も多く触れているのは、食に関する家事についてである。ジャンヌは農家の台所番という大役を任せられ、アンリエットは労働者として働く父のために、三度の食事に心を砕かねばならない。離ればなれになった二人は、理想的な料理人として指導を仰ぐ母や姉に近づくべく、家族の食事のためにメニューの工夫や料理技術の習得に余念がない。日常の食事だけでなく、晴れの日の御馳走の作り方や給仕の仕方も身につけねばならない。主婦として大人数の客のもてなしを準備・采配できる能力が求められるのである

エリザに料理を教わってアンリエットが作った最初の料理はフランスの国民食であるポ・ト・フである。どのような部位の肉をどれくらい使うか、どのような野菜を加えて調理をすると美味しくなるか、どれくらい保存が効くのか等々からスープに浮いてできる脂の利用法まで紹介されている。

一日の献立に関するアンリエットの説明は、都市労働者家庭の食事についての示

表2 アンリエットとジャンヌが報告する家事の主な項目（食関連）

	アンリエット	ジャンヌ
食に関連する家事	食事の献立 魚のソース 洗礼の日の御馳走 離乳食 牛乳の品質 市場での食料の買い物	祭日の正餐の支度と給仕 刈り入れ人のための食事 冬の保存食（野菜、果物、卵） 野菜の保存法 ジャム作り 食品の品質の見分け方

峻に富むものである。朝早く出かける父のためにアンリエットは朝食を用意しなければならない。姉のエリザはリュシアンのために食欲を満たす美味しいスープを用意するが、体の弱い少食の父は早朝に重いスープをとるのは好まないのので、アンリエットは良質のショコラを準備する。父は砂糖入りのショコラを飲んで出かけ、9時からの15分間の休憩に持参のパンを一切れ食べて、また12時まで仕事をするのである。朝食は労働者にとって健康面でも経済面でも必要であることがここで指摘されている。

——働く人が何も食べずに仕事に行くのはよくないことだわ。それで、健康にもお財布にも害を与えるお酒やら何かよくない飲み物をとる習慣がついてしまうのよ。⁽¹⁵⁾

仕事中の労働者の飲酒癖は当時改めるべきこととしてしばしば指摘されていた。次のようなリュシアンの子にもそれがうかがえる。

——腹がこんなにいっぱいだと元気に仕事ができるし、酒屋へ入りたいていう誘惑にも悩まされることはないね。⁽¹⁶⁾

夕食は軽く、スープと冷肉、野菜、卵などあり合わせのもので間に合わせるのに対し、昼食が一日で最も重い食事となる。サラダかオードブル、肉か魚料理とそれに合う野菜料理、そしてデザートをアンリエットはいつも用意する。ビーフステーキはパリっ子の大好物であり、美味しくて栄養があって手間もかからず、薄切り肉にすれば安くすむので、理想的な主菜である。ポテトフライやインゲン豆、キャベツ、ほうれん草などの野菜がよく合う。しかし、ビーフステーキばかり食卓に出すと飽きてしまうので、子牛や子羊、豚肉をかたまりで調理したものを野菜とともに出して変化をつける。大きなかたまり肉の場合、翌日の冷肉の献立のためにとっておく。冬場、保存上の問題がなくなると、魚もよく食卓に上るようになる。魚は栄養価が高く肉より安いのが、消化に悪いことがあるとされている。ハム・ソーセージも同様である。逆に緑の野菜が消化によいとして推奨されている。アンリエットの献立は全般に脂っこさを避けた消化によい都会風の軽い料理が中心である。

また、アンリエットの手紙の中で食生活にとって大切であるとされているのは、

(15) Piétrement, Maria, *op. cit.*, p. 159.

(16) *Ibid.*, p. 159, 160.

御馳走でなくても、変化のある食卓を整えるように常に創意工夫することである。「良き主婦の才能はヴァリエーションにある」とエリザはアンリエットに教える。肉の主菜一品だけの食卓は不経済、不健康で主婦の怠慢であると厳しく批難されている。何皿も料理を作ることは手間ではあるが、食材の組み合わせを工夫し、味の変化をつけて毎日喜んで家族に（特に夫に）食べてもらえるよう手間を惜しんではならない。季節ごとの工夫も忘れてはならない。年中同じようなメニューを続けるのではなく、食欲が減退しがちな夏にはソースで味に変化をつけて少しでも食欲をそそるようにし、冬には、でんぷん質に富む野菜や豆類、米などをメニューに取り入れて滋養を高めるようにする。食材の組み合わせを工夫すれば、高い肉の時には安い野菜を組み合わせるなどして家計も押さえられるし、高価なバターを多く使うソース以外にも安くて美味しいソースはいろいろとある。

シンプルだが豊かな料理。家での食事ほど美味しいものはないと夫に思わせる料理を作り続けるために、心を配り知識を総動員することが主婦に必要であるとされているのである。

ジャンヌの方は大人数の家族の食事の用意に追われる日常だが、それについてはあまり触れられていない。ジャンヌの心尽くしから Mareuil 特産の食料を詰めた籠がパリにたびたび届けられ、パリっ子のリュシアンなどは涎を流さんばかりに喜ぶのだが、確かに田舎では野菜、果物をはじめ、鶏や卵、バターなど新鮮で良質な食材に恵まれている。毎日買い物をしなければ食事の用意ができないような都会の生活は、ジャンヌには実感が湧かない。しかし、逆に食材は農場でできるものに限られているので、日常の食事は豚と野菜が中心の簡素なものである。日曜日に食べる肉は肉屋に肉を予約しておく必要がある。重労働の続く農繁期には、パリのアンリエットがめったに作ることはないと書いている脂肪分の多い肉のソース煮込みが食卓に登場する。

さらに、田舎では、収穫が途切れたり不足する時期のために備えて、食糧を保存しておく作業が欠かせない。衣生活と同じく、ここにも家事の季節性が都市生活よりはっきりと現れている。ジャンヌの手紙の食に関する記述は、保存食についての内容がその多くを占めている。夏の盛りにとれる新鮮なグリーンピースやインゲン豆などの野菜、スグリなどあらゆる果物類は、湯煎保存して冬でも味や香りを楽しむ。子どもたちの大好きなジャム作りは忙しい刈り入れの作業が一段落した後に行われるが、味見目当ての子どもたちがいそいそと手伝う楽しい作業である。収穫と加工の一連の作業が一家総出で行われることになる。ジャンヌと母親が箱に敷き詰めた麴の中に葡萄の房をこっそり保存しておき、新年の祝いの宴にそれを出して家

族を驚かせるという一幕もある。秋に雌鶏が卵を産まなくなるのを見越して、夏の終わりに卵の表面にゴムを塗り炭の粉の中に詰めて保存する方法なども紹介されている。風がよく通る屋根裏部屋は、玉葱や乾燥野菜、野菜の種などを保存する場所である。地下室にはセロリやピーツ、チコリなどの野菜を保存する。人参については家族の消費にも地下室に貯蔵するが、庭の土の中に埋めておけば、春までもっと新鮮な状態で保存することができる。ここでは、保存することが消極的ではなく積極的にとらえられている。うまく保存された農場の生産物は、端境期に市場に出せば大きな利益を生むのである。ジャンヌは、ジャムは贅沢品ではなく、必需品であり、都会では特に冬場、果物が高騰するときには貴重な資源になるとして、アンリエットにジャム作りを強く勧めている。

食事の世話で最も配慮が必要なのは幼い子どもに対してである。一歳を過ぎ、歩けるようになったアンリは離乳してスープや卵などの消化によい食べ物や牛乳を与えられる。都市で普通に販売されている牛乳は質が悪いので、エリザは、牛乳の質を悪くするブリキ容器ではなく、陶器やガラス容器に良質の牛乳を入れ、すぐ封をして販売している良心的な農場主たちから直接牛乳を買っている。高くつくが、子どもの健康のためには迷う余地はない。都会で生活するための当然払うべきコストなのである。⁽¹⁷⁾

住生活にかかわる家事

家や家財など、住まいの維持管理についてはそれほど多くの仕事が述べられているわけではない。衛生と清潔がここでのキーワードになるだろう。

日常の清掃については、アンリエットが日課について語る中で触れている。朝起

表3 アンリエットとジャンヌが報告する家事の主な項目（住関連）

	アンリエット	ジャンヌ
住に関連する家事	毎日の清掃 暖房器具 燃料 窓辺の花の世話 住居の選択 引っ越し作業	大掃除 金属製品の手入れ 床のつや出し 寝室の整え 照明の取り扱い 家の改築

(17) 都市における牛乳の製造販売をめぐるのは、無神経な保存・管理、業者によるまぜものなどの不正行為など、その質の悪さと不衛生さがこの時期、指摘され問題となっていたところである。南直人「都市生活とミルク——「近代的」食生活の一側面——」見市雅俊他著『コレラ流行と近代ヨーロッパ、青い恐怖白い街』平凡社、1990年、211-247ページ。

きると何よりもまず窓を全部開けて新鮮な大気を入れ、アパートマンの換気をする
ことが、パリの生活では必要な衛生上の決まりだとしている。寝具も大気に晒して埃
を丁寧に落とし、皺を伸ばしてメーカー直す。これは祖母に習った通りのやり
方である。床の掃き掃除、家具や扉や板壁の拭き掃除は毎日行う。

大掃除についてはジャンヌの方がよく伝えている。親族を正餐に招く前の大掃除
や、家の工事のあとの大掃除についての記述があるが、そこには、カーテン、窓ガ
ラス、鏡、金の額縁、板壁、銅や鉄、鋳鉄などの金属製調度品、革製品、炊事道具
の錫メッキや食器類の手入れ、ランプの調理台や流しの掃除に至る項目が並んでい
る。掃除だけではなく、家財類すべての手入れが *ménage* (広い意味では家事全般、
特に家の中の掃除整頓を指す) の範疇に入れられているのである。それぞれの手入
れにどのような洗剤を用いるかというレシピは、家政書の伝統的な部分を成すも
のである。苛性カリ、石鹼水、ジャヴェル水、スペイン漂白粉 (*le blanc
d'Espagne*) などの洗剤を素材によって使い分けるが、ルリハコベヤスカンボ、玉
葱、酢など、農村で昔から使われていた植物も金属や革の手入れに用いられている。
マルリエ夫人は、都会では革の手入れに専用洗剤が使われているが、それは危険な
もので、なくても十分田舎にあるもので用の済む無駄な支出であるとしている。ジ
ャンヌの洗剤レシピを受け取ったアンリエットは、とても役に立つと喜び、つい
でに、田舎ではまだ知られていない掃除の秘訣を教えようと言って、東洋から輸入
されている安価な (1個10センチメートル) 中国ブラシと呼ばれている道具——説明か
らして、たわしのことだと思われるが——を掃除や調度類の手入れに便利で欠かせ
ないものとして紹介している。家屋や家財の手入れに関する仕事については、その
ような微妙な温度差を除くと都会と農村の差はそれほど感じられない。しかし、住
居そのもののあり方は両方で非常に異なっており、それは、次のような点に見て取
ることができる。

まず、ジャンヌは家の改築工事を大きな事件として興奮して伝えている。子ども
たちが成長して手狭になった家を拡張する工事である。小さすぎる家は健康に良く
ないというジャンヌの父、マルリエ氏の考えからである。健康より大切なものはな
く、健康を保つには清潔で風通しのよい住居が必要であり、そのためにかかる費
用は金の使い道としてはよいものであるとマルリエ氏は言う。寝室をともにしてい
た子ども3人には、弟のルイに台所の横の小部屋が⁽¹⁸⁾、ジャンヌとジュリエットには

(18) 自分だけの部屋がもたらした嬉しさに、自分で部屋の掃除もできると言うルイに、父親は、掃除は特に男の子の仕事ではないとしても、必要なときにやれるようにしておく必要はあ
ると述べている。 *Ibid.*, p. 114, 115.

庭に面した寝室が新しく与えられ、元の子ども部屋を両親が寝室として使うことになる。床は田舎でよく使うタイルの代わりに、清潔で暖かい寄せ木を使い、田舎では贅沢な白い壁紙——清潔だし気分も違うという理由で——を貼り、やはり田舎では各家にまだ備わっていない閉鎖されて独立した空間を持つ清潔なトイレもマルリエ夫人の強い希望で作られることになった。⁽¹⁹⁾ ジャンヌは、夢みていた寝室がついにできあがったとき、部屋の模様をアンリエットに詳しく書き送っている。主な家具以外は自分達の手作りか自分達のお金で揃えたものばかりである。足下に十字架を飾った鉄製のベッド、お手製のベッドカバーにマット、暖炉の両側には姉妹の衣服が整理できる棚が父親のアイデアで作られ、整理筆筒には小物類や、大切な手紙、裁縫箱などがきちんとしまわれている。暖炉の上にはマリア像と一对の燭台、乾燥させたハーブや花、⁽²⁰⁾ ジャンヌとアンリエットの家族写真、崇拝する聖少女ジャンヌ・ダルクの絵も飾られている。部屋はまだ完成の状態ではなく、器用なリュシアンが義妹のためにこしらえた化粧台と書棚の作り方を教えてくれるようジャンヌはアンリエットに頼んでいる。

アンリエットの方は、引っ越しのニュースを知らせる手紙に新しい住居のことを簡単に書いている。それは小さな台所と食堂、父親の寝室から成り、アンリエットは食堂のアルコーヴに自分のベッドを置いている。風通しがよくて明るく、窓と物入れがあり、洗濯ができるように台所に水が出るという条件の住居を探すのに大変苦労したとアンリエットは言っており、都市の住宅事情は田舎ほど恵まれてはいない。菜園や果樹園に囲まれた広い農場の中のジャンヌの家とはスペース・環境面で大きな差があるのは当然である。都市住居に自然の潤いを添えるための、鳥籠で小鳥を飼って愛でる習慣や、窓辺に花を植えるささやかな楽しみをアンリエットはジャンヌに伝えている。窓辺にナスチウムやマルバアサガオを茂らせて緑と花のカーテンを作り、アンリエットは懐かしい Mareuil の美しい庭に思いを馳せるのである。

光熱の設備にも違いが見られる。農村では燃料に薪を使い暖炉を焚くのが当たり前だが、都会の労働者家庭では薪は使うことができず、コークスや石炭が主要燃料であり、ストーブが暖房器として使われている。出回り始めていた石炭を燃料とす

(19) 村にはあまりにもたしなみと清潔さの習慣が欠けており、トイレを田舎で普及させるには、熱心な主婦の存在が何人か必要だとマルリエ夫人は述べている。Ibid., p. 114.

(20) 寝室に生花を飾ることは、寝ている間に空気の不足で枯れてしまうことがあるとして母親が禁じている。Ibid., p. 177. 就寝中の換気、朝、窓を開けての換気など、部屋の空気の悪さに対する警戒は本書の各所に見られる。

る可動ストーブはまだ事故が多くて信頼性に乏しく、ガスストーブは清潔で便利だが、価格が高い。従って、アンリエットたちの家では、料理用ストーブを暖房用として併用する経済的方法を採ることになる。燃料効率がよくて臭いの少ないコークスと安い石炭とを組み合わせる燃料として使うのである。食堂と寝室の間の扉を開けておき、家中を暖めるが、寒暖計を見て15度以上に室温が暖まらないよう調節する。暑すぎるのは健康的でなく、外との寒暖の差が激しいとかえって風邪をひくという理由からである。換気と空気の乾燥には常に注意を払って、窓を時々開き、ストーブには水を張ったたらいをかけて蒸気を出させる。冬はいつも湯が使える、煮物やオープン料理など長時間じっくり仕込む料理を作りながら暖房もできる料理ストーブは、狭い都市住居であるからこそその生活の便をもたらしてくれる経済的暖房である。照明に関するジャンヌの記述は、複数の照明手段の存在を示唆している。煙が出てロウが垂れるろうそく類は不便であり、植物油は高くつくので節約の必要上敬遠され、ジャンヌの家でもっぱら使われているのは灯油ランプである。灯油やガソリンなどの鉱物油は引火事故が恐ろしいので、特に慎重な取り扱いが必要である。ランプ掃除を怠ることなく、陽の明るいうちに常に燃料を満たしておくようにし、子どもは夜間、明かりを持って家畜小屋や屋根裏部屋に行くことを禁止され、主婦が就寝前に家中の火の元を点検して回る。照明方法の改善が見られたとはいえ、油断すると一瞬で家財もろとも失ってしまう危険をはらんでいたのである。